

5年目を迎える筑波研修指導業務

桜が満開となった4月上旬、当社恒例のお花見を JICA 筑波国際センター中庭の桜の下を借りて行った。集団研修「野菜栽培技術Ⅱ」コース（以下、「野菜コース」）と「南部アフリカ野菜・畑作技術」コース（以下、「南部アフリカコース」）の研修員を交え、良い天候のせいもあってダンス、テニスと楽しい時間を過ごした。

JICA 筑波での研修業務も5年目となる本年、国際耕種は継続して実施中の「南部アフリカコース」に加え、新たに「野菜コース」を受託した。現在、4名の指導員を筑波に配置し、両コースを含めると16カ国、21名の研修員の技術指導に当たっている。「南部アフリカコース」では本年から研修期間の延長が認められ、課題であった畑作の輪作を本格的に指導できる状況となった。また、「野菜コース」では、野菜種子生産、高収量・高品質のための野菜栽培、環境保全型の野菜栽培などの技術を指導している。

さて、近年、技術研修の目的として地域振興に寄与する人材育成に加えて、地域の問題解決策を見出す研修に力点を置く方針が打ち出され、研修で習得した技術を実際に現場に反映させるための実現可能なアクションプランを研修期間中に作り上げることが要望されている。この方針に対応して、これまでのカントリレポートに変え、研修員各自の担当する地域や業務に関するジョブレポートの発表を研修当初に実施し、研修員の抱える問題点を明確にする指導を行い、後期に実現可能なアクションプランの発表という流れを実施している。本年実施した当社独自のフォローアップ調査では、これらのアクションプランの中からボツワナ及びナミビアの研修員が自国で実践している状況を現地で確認している。研修中に作成されたアクションプランが現場で実践されようとしているのを目にすることは、研修担当者としてとても嬉しいことである。

しかし、「問題解決型研修はアクションプランの発表である」というように短絡してしまわないように注意しなくてはならない。ジョブレポート作成で改めて認識した現場の問題の多くは作物の低収量である。作物が持っている本来の生産性を引き出せていない要因は多々あり、そして複雑に絡み合っ一筋縄では解決できない。この問題にチャレンジする研修員にとっては、生育診断や対処方法の知識の向上、及び現場で実際に指導できる技術・技能の向上が不可欠である。つまり、人材育成と問題解決型のアプローチは表裏一体の関係にあるということを強く感じる。そこで、毎日の指導業務では、様々な活動を通して研修員が抱える問題解決のアイデアを見付け出すことができるよう努めている。本年度の「南部アフリカコース」からは生産性の重要要素である土壌の肥沃度向上と維持、地域有用資源の活用、有機物の循環的利用等を研修員とのディスカッションを通じ整理し、現在そして将来に向け研修項目として充実させていきたい。今年の研修員を見ていると、何か取っ掛かりが見出せそうである。「研修員と共に学び、共に作り上げる研修」を理想に、今後も研修業務に取り組んでいきたい。（充実した畑作実習で、腰痛に苦しめられる日々の筑波より、長谷川）



筑波 TBIC での花見会



圃場で汗を流す研修員